

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：25407

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780502

研究課題名(和文) コミュニケーションを主軸とした保幼小中校種間連携カリキュラム開発研究

研究課題名(英文) Research to develop collaborative curriculum between nurseries, kindergartens, elementary school and junior high school, focusing on communication

研究代表者

森 美智代 (MORI, Michiyo)

福山市立大学・教育学部・准教授

研究者番号：00369779

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、倫理性に重きを置く国語科の目標論の展開と、そうしたコミュニケーション観に基づくカリキュラムの構築を、保幼小中校種間の連携の内に構想し、実践的に検証することを目指した。そのために、まずは倫理性の内実についての考察を行った。また、幼児教育においては、虚構世界と現実世界の往来を通じて、子どもたちの間に自己肯定感と自他の尊重の意識が涵養されていく。それを支えに、子どもたちは、世界に対する見方・考え方を獲得し更新していく中で、多様な価値観の享受を実現していくことを明らかにした。こうした物語体験を軸に据えることで、倫理性に重きを置く学校種間連携カリキュラムの構築が可能となることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to build a theory of the first language education goal that emphasizes ethics and to construct a curriculum that emphasizes ethical communication. This research verifies that this curriculum realizes collaboration among school types. For that purpose, we first examined the facts of ethics through philosophical exploration. In early childhood education, children's self-affirmation feeling and consciousness of respect for others and others grow up through the fictional world and the real world trafficking. In support of them(children's self-affirmation feeling and consciousness of respect for others and others), children realize acceptance of various values through acquiring and updating the view towards the world. This research clarified that construction of a curriculum for cooperation between schools that places emphasis on ethics is possible by focusing on the story experience in children.

研究分野：国語教育学

キーワード：コミュニケーション 目標論 カリキュラム論 倫理性 受動性 物語体験

1. 研究開始当初の背景

コミュニケーションを主軸としたカリキュラムは、国語教育では「学習指導要領」の項目、「話すこと・聞くこと」の領域を中心に研究が重ねられてきた。直近の10年間の研究を対象として全国大学国語教育学会が刊行した『国語科教育学研究の成果と展望』では、「話すこと・聞くこと」教育のカリキュラム論を、論理性と倫理性との二極について、その統合のあり方という側面からレビューした(甲斐雄一郎・森美智代「序 話すこと・聞くことの学習指導に関する研究の概観と展望」学芸図書、2013年)。それによれば、従来のカリキュラム論には、大きく分けて、コミュニケーションを機能の面から細分化し、論理性と倫理性とをバランスよくカリキュラム上に配列する機能型と、論理性と倫理性とを段階に応じて合わせて醸成していく総合型とがある(前掲 p.58)。

このうち本研究は総合型に位置づけられるが、従来のものと異なるのは、倫理性を主軸に置くという点である。これまでは、論理性を系統立てることによりカリキュラム化するという研究はあっても、倫理性そのものについての詳細な考察は十分に為されてはこなかった。結果として、倫理性は、より高度な能力を育成するための学びの場の醸成としてのみ、着目されてきた現状がある。しかし、エマニュエル・レヴィナスの他者論に代表される哲学や現代思想の潮流をコミュニケーション教育の側面から捉え直すことにより、倫理性の詳細を解明できれば、こうした倫理性を主軸としたカリキュラムの構想も可能となると考えられる(森美智代『実践=教育思想の構築-「話すこと・聞くこと」教育の現象学-』溪水社、2011年)。

このような倫理性の解明が求められる背景には、次のような学習者の実態がある。以下に挙げるのは、広島県教育委員会による「生活と学習に関する調査」の結果の一部を抜粋したものである(広島県教育委員会 HP より)。調査は平成25年6月11日(火)に、県下の小学校第5学年及び特別支援学校小学部第5学年を対象として、調査実施校数490校、集計対象者数24,612名に、「基礎・基本」定着状況調査」とともに実施された意識調査で、質問紙によるものである。

表1から、「将来の夢や目標をもっている」と回答した学習者が90%を超えているのに対し、「自分のよさが、まわりの人から認められている」と捉えている学習者は60%に留まっていることがわかる。ここから、将来に対して前向きに捉えることのできる学習者たちではあるが、現在の人間関係においては、周りからの承認・受容を実感として得ることができず、そのことが、自己肯定感に関する数値にも影響を与えているものと推測できる。さらに、このような自己肯定感に関する意識調査は、各小学校が独自に行っている全学年対象調査においても、学年が上がるほど数値が低くなる(自己肯定感が低くなる)傾向として顕現化するに至っている。

学年が上がるに従い自己肯定感が低くなる傾向は、学習者の自己形成・自己確立とも関連しており、その原因を単純に言及することは難しいものの、学習者には、学年が上がるに従いより高度な人間関係の形成や倫理性に関する課題が要求されることが予想される。したがって、倫理性に関するより詳細な解明は急務のことであり、また倫理的側面は、学習初期に教室環境づくりとしてのみ重視されるのではなく、段階に応じてカリキュラム化される必要があるといえよう。

2. 研究の目的

(1) 倫理性の解明(理論研究)

まず、エマニュエル・レヴィナスの他者論に代表されるような哲学や現代思想の潮流から、倫理性の詳細についての考察を行う。レヴィナスの他者論は、倫理の根源を追究したものであるとして知られているが、レヴィナスとは異なる立場からこの根源に迫った思想家にハンナ・アーレントがいる。そして、これらの思想家の源流にはジャン・ジャック・ルソーがいる。

また、他者論は、国語教育においては、特に文学教育の領域において盛んに論じられてきた。しかし、文学教育の領域における他者論は、教材解釈の文脈での言語化に縛られる面がある。本研究では、それらの他者論を押さえつつも、哲学や現代思想の潮流から新たな分析枠を提出し、それに基づく先行研究の検討を最初の手がかりとして、コミュニケーション教育に必要な倫理性の解明を行う(森美智代「文学体験に関する理論的検討ルソーによる「解釈から証言へ」の移行に着目して」『国語教育思想研究』、第7号、2013

表1 小学校 生活と学習に関する意識・実態(抜粋)

番号	領域	内容	あてはまる			あてはまらない		
			よく	やや	計	計	あまり	全く
(36)	自己実	将来の夢や目標をもっています。	80.8	10.4	91.2	8.8	5.5	3.3
(38)	現力・自	自分には、よいところがあります。	40.9	34.5	75.4	24.7	17.2	7.5
(39)	己効力感	自分のよさは、まわりの人から認められていると思います。	23.9	36.5	60.4	39.6	26.9	12.7

年)。

(2) 実践の検討及び実態調査(フィールド研究)

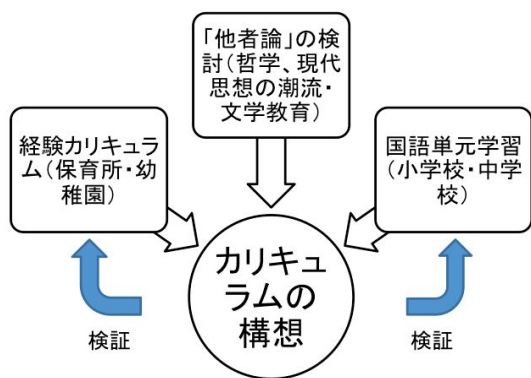
(1)において提出した分析枠をもとに、実践及び実践報告の再定位を行う。そのための視点として次の2点を挙げる。一つは、a. 保育研究における経験カリキュラムの考え方、もう一つは、b. 小中学校における国語単元学習の考え方である。保育・幼児教育の領域においては、就学以後の教科・学問の系統性に裏付けられた教科カリキュラムに対して、子どもの生活に根ざして設えられる経験カリキュラムによって具体的な年間のカリキュラムや週案、日案を構想することが当然のこととして定着している。一方、教科カリキュラムとはいえ、小学校・中学校で実施されている国語単元学習は、単元を学問的系統性や教材と捉えるのではなく、学習者の生活をまとまりとする生活単元の考え方から、授業づくりや教室づくりを構想するものである。両者は根底に、学習者の生活中心という共通する教育観を抱きながらも、直接結びつけて論じられることが少なく、一般に、理論としても実践としても別々のものと捉えられている。この両者を本質面で連携させるべく、実際に行われている教育実践の集積と実践報告の読み直しを行う。

(3) カリキュラムの構想と一部検証

(1)(2)で得られた知見にもとづき、カリキュラムを構想し、各学校種において検証を行う。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するために以下のような計画を立案した。



本研究は、1. 理論研究(哲学・現代思想に関する理論の検討、経験カリキュラム・国語単元学習に関する理論の検討)、2. フィールド研究(保育所・幼稚園での実態調査、小学校・中学校での実態調査)、3. カリキュラムの構想、4. 教育実践の実験的実施と検証、5. 成果の公表の5段階で進捗させていく。

また、フィールド研究については、保育

所・幼稚園で活動している在野の教育者と複数の小学校・中学校の教諭を研究協力者として、フィールドワークやインタビューによる実態調査と、カリキュラム構想にもとづく実験的な教育実践による検証を行う。なお、カリキュラムの構想過程においても、研究協力者による知見を取り入れながら、理論知と経験知との融合に取り組む。

4. 研究成果

(1) 理論的枠組みの追究

倫理性の解明

「聞くこと」の能動性と受動性とは対概念であり、対立概念ではない。ゆえに本研究は、問答法を原型とする合意形成の力や想像の同一化に向かう倫理的側面の育成を否定するものではない。むしろ、「話すこと・聞くこと」の教育の主流は、能動的な主体の育成であると言える。その上で本研究において見出したのは、他者理解の過程の只中においても、生起する自己の感情をまっすぐに受けとめ、自らの価値や価値観を揺るがし続ける聞き手であり、かつ、共通の出来事を分有する目撃証人としての聞き手の育成である。そのためには、出来事を分有していく場・環境の保証と、学習者の心の発達に応じた教育課程の提出が求められる。

自己と他者の対等性・相互性を越えた「聞くこと」の教育を考察することによって、自律的・自発的とは「別の仕方」で特徴づけられる主体のあり様や、より厳格に根源的な倫理的関係を論じることが可能となると考えた。本研究が追求するのは、マイノリティやサバルタンといった社会的弱者をマジョリティのうちに還元することなく共生していくための教育のあり様である。そのための思想的背景として、レヴィナスの「他者」論や「囚人のコンパッション」を巡る議論の意義と必然性を明らかにした。

なお、本研究においては、出来事を分有していく場・環境の保証と、学習者の心の発達に応じた教育課程の提出について、これらの必要性を指摘するに留まった。今後の課題である。

物語世界と学習者の関わり

物語世界と学習者の関わりを、図1のように、ライアン言う可能世界の中心移動から考察した。

私たちは読書行為の開始と同時に物語世界(ライアンで言えばテキストの指示対象世界)に没入(中心移動)し、虚構世界における「実際の世界」を「わたしにとって」の現実として生きることになる(その世界には様々な登場人物が生きていて、それぞれに虚構を構成するので、複層的である)。これらの世界の一つひとつを「代替可能世界」と呼ぶことができよう。

物語世界への没入が、代替可能世界(APW)への中心移動を可能にするからこそ、学習者

はテキストの《実際の世界》(TAW)において葛藤を経験することができる。さらには、TAWとAWとが別々に同時存在的であるからこそ、学習者は実際の世界(AW)における慣習に囚われることなく、物語世界の登場人物に対して普遍的な倫理原理に基づいた判断や理由付けを行うことが可能となる。

複数世界の同時存在を保証することによって、実際の世界(AW)とは異なる世界(テキストの《実際の世界》(TAW))において、学習者は、文学作品における主題を巡る終わることのない議論を徹底して追究することが可能となる。いわば、実際の世界(AW)における自己を保留した状態で、AWとは別の自己が、自由に思考し、自己表現することが可能となるのである。

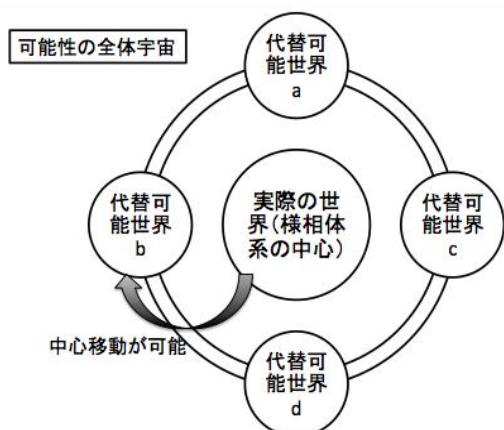


図1 ライアの言う「中心移動」(森が作成)

(2) 幼児教育からみた連携カリキュラムの可能性

乳幼児期において不分離であった虚構世界と現実世界は、児童後期には分割し両者間を往来する中で省察と想像(創造)を繰り返すこととなる。その繰り返しを通じて、子どもたちの間に自己肯定感と自他の尊重の意識が涵養されていく。それを支えに、世界に対する見方・考え方を獲得し、更新していく中で、現代社会を生き抜くための多様な価値観の享受を可能にしていく。この過程を図2に示した。

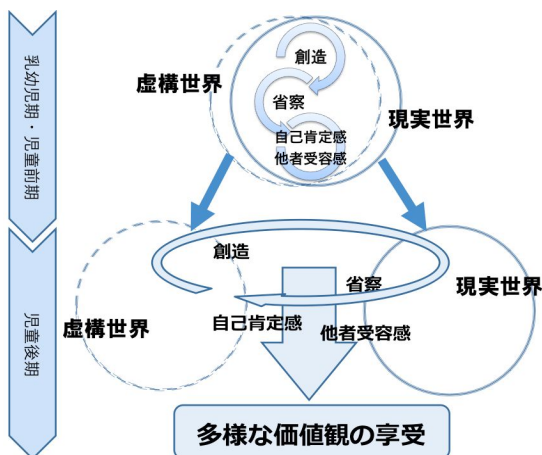


図2 乳幼児期と児童期における虚構世界と現実世界の関係

結果として、以下の2点の示唆を得るに至った。一つ目に、保幼小の連携カリキュラムの構築のためには、現実世界と虚構世界の往還(複数の世界には生きることの保証)を柱とすると実現に近づくのではないかと。二つ目に、現実世界と虚構世界の往還を説明する理論的枠組みの一つとして、物語理論を挙げることができるのではないかとという仮説である。

(3) 小学校教育からみた連携カリキュラムの可能性

小学校1年生の教室へのフィールド調査において、以下のようなエピソードが記録された。

A小1組 5月15日「はなのみち」

【エピソード】

p.33の絵を見ながら、
T「季節はいつ？」
C「秋と春」、「冬と春」(半数ずつ)
C「鳥がいる窓が秋っぽい」
C「どんぐりがあるから秋」
C「冬は冬眠しているはずだから、冬じゃないと思う。」近くの子と話し合う。
途中で、
T「ヒント、秋ではありません」
その後も、「秋だ」と言う子に対して、「秋じゃないと、だって、先生が言ったもん。」と言い返す。

【考察】

絵を見ながら、秋か冬か理由をつけて答えている。p.33の挿絵だけに限定していたので、子どもは考えにくかった。p.33に描いてあるのは、ストーブなのかコンロなのか、思い思いに伝えていた。先生が途中で「ヒント、秋ではありません。」と言っても、やっぱり秋だという子は何人かいた。「秋なのか、冬なのか、ストーブなのかコンロなのか」ということが問題なのではなく、絵を見てお話を読んで想像を広げていくことが大切なのではないか。

このエピソードにおける子どもたちのやりとりは、個々の子どもの興味によって支えられ、教師の制御が行き届かず、一見バラバラに活動している授業のように見える。しかし、子どもたちの発言を中心に、ゆるやかに組み立てられていくA組の授業においては、想像の多様さに加え、発表途中でも近くの子と話し合いを始めてしまうほどの意欲や創意工夫、集中力が見て取れた。「秋なのか冬なのか、ストーブなのかコンロなのか」という子ども同士の議論からは、思考力の高まりも見て取れた。

小学校の場合、幼児教育に比べて「ねらい」がある程度選定されている。ゆえに教科書には、単元でつきたい力が明確に分かるよう、単元の冒頭で「ねらい」を明確にし、その「ね

らい」に則した活動が示されている。しかし、国語科においては明確な到達目標の設定がなされ、全員で一斉に授業が展開していく場合だけでなく、子どもたちの興味関心を最重視し、到達目標が明確には定まらない場合（「到達目標を内に含んだ方向目標」に向けた言葉がけ）においても、子どもたちの想像力や思考力が高まる事例が見られた。この事例は、教科書に記載されている「ねらい」を絶対視し、単線的な授業を展開することのみが、国語科における質の高い学びをもたらすわけではないことを示している。むしろ国語科においては、子どもの興味関心をもとに、ゆるやかに授業を組み立てていけるような「ねらい」を、教室ごとに設定することが有効であると指摘できる。ゆえに、国語科の授業においては、時に教師による筋書きから外れ、当初の目的とは異なる方向へと進むことを厭わず、子どもの意欲関心を原動力として進んでいけるよう構想する必要がある。

こうした国語科の授業は、幼児教育との関連性が高い。物語教材「はなのみち」では、「なぜ花の一本道ができたのか」に対する子どもたちの反応から、「袋の中身」や「季節」に対する子どもたちの誤読が確認された。この誤読を「問題点モデル」によって解決に向かうとするのではなく、「信頼モデル」によって子どもたちのさらなる未来を見通し、この時培った想像力と思考力の方を評価する視点が必要である。国語科の教育内容が、行きつ戻りつしながら、一見同じことを繰り返す、螺旋的に積み上げられていくのには、この時の誤読がこの時限りの修正の効かないものではないことを示している。この時の子どもたちにとっては、誤読の修正以上に、優先されるべき想像力、思考力の高まりがあったことに自覚的になる必要がある。

したがって、国語科においては、幼児教育と小学校入門期の連続性を担保することは、決して困難ではないと言える。むしろ、時数の多い国語科においてこそ、連続性を意識した授業を構想していくことが、子どもたちの確かな学びを保証すると言える。このように、国語科においてこそ保幼小連携カリキュラムの構築は可能であると言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

(1) 森美智代、小学校での書写指導に対する教師の指導観の分析 「国語科指導法」(書写実技)受講者の実態調査、福山市立大学教育学部研究紀要、査読有、第6巻、2018、pp.97-106、DOI: info:doi/10.15096/fcu_education.06.10

(2) 森美智代、提案3 ディシプリン重視の立場から「教科の本質」を再考する、国語科

教育、査読無、第83集、2018、pp.12-14、DOI: 10.20555/kokugoka.83.0_12

(3) 森美智代・磯貝淳一、日本語書記史を観点とする日本語話者の論理意識に関する試論-出来事に対する時系列連鎖型の認識傾向に注目して-、国語教育思想研究、査読無、第14号、2017、pp.36-44、http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00044834

(4) 森美智代、コミュニケーションの言語化されない部分に着目した聞く力の育成、教育学国語教育、査読無、No.811、2017、pp.36-39

(5) 森美智代、思想と方法の一体化と言語教育観の更新、リテラシーズ、査読有、16、2015、pp.51-60

(6) 森美智代、授業研究に臨む研究者のスタンスの違いと国語教育の可能性、国語教育思想研究、査読無、第10号、2015、pp.21-28、http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00037900

(7) 森美智代、次世代の教師を育てる教科教育学関連授業の取り組み 国語教育学の立場から、2014年度日本教育学会中国地区研究活動報告、査読無、2015、pp.18-26

(8) 森美智代、高橋典子、「物語りの因果性」に関する考察：物語教材の授業における「意味づけ発問」の分析から、福山市立大学教育学部研究紀要、査読有、2、2014、pp.117-125、DOI: info:doi/10.15096/fcu_education.02.12

〔学会発表〕(計9件)

(1) 森美智代・倉盛美穂子・太田直樹、小学校入門期における国語科・算数科の課題、第2回初等教育カリキュラム学会、2018年1月7日、広島大学

(2) 森美智代、コンピテンシーと国語科教育-ディシプリン重視の立場から「教科の本質」を再考する-(シンポジウム)、第133回全国大学国語教育学会、2017年11月4日、福山市立大学

(3) 森美智代、「聞くこと」の教育における能動性と受動性に関する考察、第132回全国大学国語教育学会、2017年5月27日、岩手大学

(4) 森美智代、虚構世界との往還に着目した保幼小連携のための一考察、第1回初等教育カリキュラム学会、2017年1月8日、広島大学

(5) 森美智代、複数世界の多様性を学ぶ文学教育の考察、第130回全国大学国語教育学会、2016年5月28日、新潟大学

(6) 森美智代、可能世界を立ち上げる文学の教室 小学校6年生の文学の授業をもとに、第67回日本文学協会国語教育部会夏期研究集会(シンポジウム)、2015年8月9日、東京都立産業技術高等専門学校

(7) 森美智代、次世代の教師を育てる教科教育学関連授業の取り組み 国語教育学の立

場から、日本教育学会中国地区研究活動
研究交流会(シンポジウム)、2015年7月
25日、広島大学

(8)森美智代、今を生きるための文学教育の
試み - 『よだかの星』の授業実践から -、
第128回全国大学国語教育学会、2015年5
月30日、姫路商工会議

(9)森美智代、国語科における対話概念の理
論的検討、第126回全国大学国語教育学会、
2014年5月18日、ウインク愛知

〔図書〕(計5件)

(1) 羽野ゆつ子・倉盛美穂子・梶井芳明編著、
あなたと創る教育心理学、ナカニシヤ出版、
2017、193

(2) 『国語教育学研究の創成と展開』編集委
員会編、溪水社、国語教育学研究の創成と展
開、2015、534

(3)高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元
隆春編著、国語科重要用語事典、明治図書、
2015、280

(4)山元隆春編著、教師教育講座 第12巻 中
等国語教育、協同出版、2015、422

(5)細川秀雄編著、増補改訂 研究計画書デザ
イン 大学院入試から修士論文完成まで、東
京図書、2015、224

6. 研究組織

(1)研究代表者

森 美智代 (MORI MICHIO)

福山市立大学・教育学部・准教授

研究者番号：00369779

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

近藤 秀子 (KONDO HIDEKO)

岡崎市立矢作北中学校・教諭

高橋 典子 (TKAHASHI NORIKO)

福山市立霞小学校・教諭